

安田女子大学紀要 43, 135-144 2015.

## 平和を考えるための読書指導のあり方 —平和を考えるための小学校低学年用読書教材について—

滝 浪 常 雄

A Study of Reading Guidance for the Peace Education  
Reading Material for the Peace Education in Lower Grades of Elementary School

Tsuneo TAKINAMI

### 要 旨

本稿は、小学校低学年を対象に平和を考えさせるための読書指導のあり方を検討し、そのための読書材を提案するものである。平和教育は学校現場において現在でも多くの実践がなされている。国語科学習においても、平和を考えるための教材が多く取り上げられ、教材によっては、その関連図書として読書リストが挙げられている。しかし、小学校低学年において、国語教科書には平和を考えるための教材は掲載されていない。なぜなら発達段階として、児童には精神的に負担が大きいと考えられているからである。それについて否定はしないが、平和教育は必ずしも戦争を如実に表した作品を読むだけでなく、内容を空想やデフォルメした形で提示することで学ぶことができるのではないかと考えた。そこで小学校低学年における読書指導のあり方を踏まえ、選書の観点を明らかにし、観点到合致していると考えられる二冊の絵本を読書教材として提案するものである。

キーワード：平和教育 読書指導 小学校低学年 読書教材

### 1. は じ め に

#### 1.1 広島市内における小中学校の平和教育の現状から

平成23年度の現行学習指導要領の施行に際して、広島市は平和教育カリキュラムの見直しを行った。その実情の一つとして、原爆投下の時刻の認知が小学生では3割という調査結果が示された<sup>1</sup>。この調査結果によって、広島市は原爆の問題について風化の怖れがあると危惧した。さらに、風化といえば、原爆を語る体験者「語り部」が少なくなり、生存者が高齢を迎えているという現状があった。したがって、現在もその記録の保存が進められているが、次世代への継承問題

<sup>1</sup> 広島市教育委員会指導第二課より平成23年度に「広島市立学校『平和教育プログラム』の骨子」が出された。その中で「(2) 平和に関する意識実態調査等の主な結果」として平成22年度に原爆投下の年や日時を正確に答えられた小学生は33%, 中学生56%, 高校生66%にとどまるといった実態が明らかになっている。市教委はこれを機に従来の平和教育プログラムを見直し、平成23年度から新しいプログラムを策定し、現在に至っている。

が表面化してきている。どう継承していくかは大きな課題である。

そこで本稿では広島市の課題を踏まえた上で、学校教育における読書活動の一環として、平和を考えるための読書を位置づけることを模索したい。その際、小学校低学年に焦点化して、扱う必読図書としての読書材の選定と、そのための読書指導の在り方を検討してみたい。小学校低学年を扱う理由は、中学年以上は、比較的教科書教材として戦争を題材にした作品が掲載されていたり、平和関連の読書が紹介されていたりする。しかし、小学校低学年においては平和教材はおろか、関連読書は掲載されていない。おそらく平和を考えると、戦争の悲惨さなどを取り上げた教材が提示され、発達段階からいっても精神的に負担がかかると思われるからである。しかし、平和教育、平和学習は小学校低学年でも行われていくべきであることを考えると、単に現実の戦争を題材にした教材ではないもので、平和を学べるはずである。そこにこそ読書活動の意義があると考えた。

## 1.2 広島市立図書館の図書リストの課題から

小学校低学年において平和を考えるための読書活動を進める上で、まず広島市立図書館における平和に関する図書のリストについて調べてみた。市立図書館では、図書リストとして『ほんはともだち '12<sup>2)</sup>』が発行されている。その中に「原爆関係児童書リスト」として690余りの作品が掲載され、推奨されている。平和を願う都市の図書館としては質的にも量的にも充実したラインナップと言ってよい。

次に、幼児、小学校低学年向けリストに関して掲載されている作品群は、絵本73冊、紙芝居5冊（ちなみに5冊は『原爆の子さだ子の願い』『はだしのゲン』『ヒロシマへ行って』『平和のちかい』『平和の祈り』）であった。特に「子どもへ原爆を語りつく絵本」としては12冊を選定している。原爆関連の書籍が多いことは、広島市としては当然の選定と言わざるを得ない。広島市が「0歳児から平和教育」を掲げているだけあって、図書リストが充実していると言える。紙芝居作品が少ないことが課題であるが、これは図書館の問題ではなく、紙芝居作品そのものが少ないという現状もある。

さらに、その活用状況についてであるが、「子ども図書館」に問い合わせると、特に市内の幼保園、小中学校と連携した活動はしていないとのことであった。せっかくの図書リストが積極的に活用されていない点を見ると、図書館と学校との連携の一つとして、平和教育の一環に組み込むことが課題である。

広島市の図書館の図書リストから言えることは、どの図書館においても平和を考えるために図書リストの作成は必須であるということである。しかし、全国的には平和に関する図書コーナーが時期によって設置されているであろうから、そのこと自体は問題ではない。むしろ図書リストの学校における活用に課題が残ると考える。やはり、教師が図書リストを使って、または図書館司書や学校司書と共に平和教材の開発を行って、学習に生かしていくことが望まれる。

## 2. 小学校低学年における平和を考えるための読書指導

### 2.1 学校教育における読書指導のあり方

平和教育関連の図書選定検討の前に、そもそも学校教育における読書指導のあり方を確認して

\*2 本リストは2012に発行されているものである。各図書館に要望すれば入手できる。

おきたい。以下は全国学校図書館協議会が選定した図書リストの中で、読書の定義と意義付けがされている。

読書は、単に楽しみのためだけにあるものではない。優れた文学作品や、哲学書、宗教書等からは、深い感動に裏づけされた人生の指針を得、社会認識の目が開かれる。成長期にある子どもの精神発達に欠くことのできない栄養源となるものである。また、古今東西の蓄積された文化遺産を継承し、さらにそれを発展させるためにも読書活動は欠くことができない。あるいはよりよく生きるために、当面する課題を解決しようとするとき、それに必要な情報の多くは、読書によって得られるものである。平和で民主的な社会を作り、主体的な生きる力を持つために、子どもを読書のできる人間に育てることが、現代教育の課題である。(全国学校図書館協議会必読図書委員会編『何をどう読ませるか小学校低学年』1994 p16) [下線は筆者]

また、人間形成の要としての読書指導の在り方が以下のように述べられている。

読書指導のねらいは、読書意欲、読書能力、読書態度等を体系的に指導することと、読書活動を通して子どもの人間形成をはかることがねらいである。(同掲書p16) [下線は筆者]

「人間形成をはかる」上で4つの項目を挙げている。①豊かな心情を育てる。②自己の発見と確立をはかる。(自我の確立) ③社会のなかでの生き方を考えさせる。(社会適応、国際化) ④科学的な思考と態度を育てる。(核問題、環境問題) これら4項目を育てることが読書が人間形成に寄与すべき点である。どの項目も平和教育にはふさわしい項目であるが、「平和」という文言は記されていない。結果的に平和な世の中の理想を掲げているといえよう。

## 2.2 小学校低学年の読書指導

小学校低学年における読書指導の在り方として、前述した全国学校図書館協議会必読図書委員会編『何をどう読ませるか 小学校低学年』(1994)において、以下のように「読み聞かせ」を推奨している。

学校生活への適応、教師との人間関係安定のために「読み聞かせ」が有効。

まだ、読書を活字主体で考える時期ではない。活字が読めるようになったとはいえ、自分で読んだ文章をイメージ化し、内容を理解して感動するまでの成長が充分だとはいえないからである。個人で、拾い読みやたどり読みをしながら本と親しむのと並行して、理解しやすくイメージが豊かに広げられる音声言語に変えられた書きことばとの出会いをさせるのを、読書の主としたい。(同掲書 p26)

読み聞かせ中心の集団読書が効果的であると述べている。その利点としては以下に示したことが言える。

- 読み手と聞き手が同じ空間時間を過ごすことができる。(一体感、ライブ感)
- 子どもの反応を見ながら、読み手は読むペースを合わせられる。(対面交流)
- 読み手は読みながら、子どもの反応に応えられる。(返事、表情、態度で)

本書では読み聞かせをかなり推奨しているが、集団読書という点では紙芝居も読書指導の一翼

を担えると考える。紙芝居は絵本よりも大きく、絵しかないことや、抜くという演出効果によって、より効果的に内容を伝えることができる。絵本が紙芝居にリライトされている場合もあり、小学校低学年でも十分、読書指導としての機能を発揮することが期待される。

### 2.3 平和を考えるための読書の目的

読書指導の意義は前述したように、①豊かな心情を育てる。②自己の発見と確立をはかる。(自我の確立) ③社会のなかでの生き方を考えさせる。(社会適応, 国際化) ④科学的な思考と態度を育てる。(核問題, 環境問題), といったことにある。その前提の中で平和を考えること自体は、どの項目にも当てはまる内容である。平和を考えることの意義は、上記の4項目を充たしているが、現在の国際社会の状況を俯瞰してみれば自明のこととして意義は十分あるといえる。毎日のようにテレビや新聞で取り上げられる地域紛争や宗教対立、領土問題は、われわれと密接に関わっている日常の問題である。我が国周辺も決して安心できない危機的状況にある。しかも、我が国は戦争を経験し、人類史上初の大規模被害を受けた国である以上、平和への希求は国民的宿願である。

しかし、文科省の学習指導要領においては民主教育は謳われていても、平和教育は特に謳われていない。だから、「平和」の考えがないと考えるのは性急であろうが、なぜ「平和」の言葉ないのかは疑問を持たざるを得ない。この疑問についてはまだ明らかにしていないが、現行学習指導要領小学校編においては「平和」という文言が代替概念の言葉によって表現されている、ということと言える。

たとえば国語科教育との関連でいえば、『小学校学習指導要領解説国語編』における「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い 3取り上げる教材についての観点」の中に「カ 生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと」「コ 世界の風土や文化などを理解し、国際協調の精神を養うのに役立つこと」とある。「生命尊重、思いやりの心、国際協調の精神」は「平和」という概念の一部と考えてよいだろう。<sup>3</sup>

また、『学習指導要領解説 道徳編』においては、自立心、自律性、自他の生命を尊重する態度を養うことが目標として掲げられている。特に「自他の生命尊重」という文言は平和を考える上で重要なキーワードである。そして、各学年の目標に目を向けると、低学年においては「基本的な生活習慣」、「社会生活上のきまり」、「善悪の判断」、「人間としてしてはならないこと」等が明記されている。高学年では「法やきまり遵守」、「相手の立場理解」、「支え合う」、「国家・社会の一員の自覚」、「自己の生き方を考える」こととある。戦争の発端はまさに相手の立場の無理解であり、十分な対話なしに国際法を無視して武力に訴えるところから生じている。その結果人間としてしてはならないことが行われるという戦争状態に陥ると考えると、やはり平和の概念の一部と考えられる。

このように「平和」の代替概念として、さまざまな言葉によって表現されていると考えた方が妥当である。実際の指導においても「平和」を直接唱えるより、心の教育として指導することが小学校低学年段階では妥当な選択であると考ええる。

そう考えれば、平和教育の基盤は、まさに日常の心の耕しにあると言えるだろう。次に、教育活動全般にわたって行われることではあるが、読書活動が平和教育に貢献する意味について考え

<sup>3</sup> 「平和」には多義的な意味がある。単に戦争と対立する意味だけではなく、人との穏やかな関係を表す場合もある。この点から平和を道徳などの項目と関連づけることができる。

てみたい。

読書は、「単に楽しみのためだけにあるものではない。優れた文学作品や、哲学書、宗教書等からは、深い感動に裏づけされた人生の指針を得、社会認識の目が開かれる。成長期にある子どもの精神発達に欠くことのできない栄養源となるものである。」(前掲書) 平和について考える上で、読解という授業展開よりも、読書という手段が有効であると考え。というのも、読解教材は教材の内容に限定され、方向性が定められていくものであり、平和ということを考える上では教材数が少なく、多面的な理解が不足していると考え。たとえば多面的な見方として、戦争を考えた場合、加害者の側と被害者の側でとらえることが必要であり、日本はそのどちらの立場も経験している。したがって、多くの作品に触れ、多面的に平和を考えるという点では、読書活動による学びは成立する可能性を持っている。また、読解指導以上に読書指導によって自由に語り合うことが、平和という多様な概念を抱えたテーマを考える上では重要である。

したがって、読解指導以上に読書という方法がもっとも実現可能な方法だと言える。

そこで、平和を考える上で読書としての目的を以下のように挙げてみた。

- ①戦争の悲惨な現状を理解する。
- ②被害者と加害者の存在を知る。
- ③戦争・紛争の原因(歴史)を知る。
- ④平和の状態を知る。
- ⑤他の民族、他の文化、他の宗教、他の生活習慣を理解する。(異文化間理解)
- ⑥人間の尊厳を考える。
- ⑦戦争体験や戦争の物語を読み継いでいく。

①から③までは、戦争そのものの状態を扱うことを意図している。やはり、戦争の悲惨な状態、加害者と被害者の関係を理解することは平和を考える前提条件である。小学校でも高学年ぐらいいなれば、日本史を学ぶこともあり、戦争のアクチュアリティを理解することが重要である。

④は平和という状態のありようを理解することで、戦争状態の真逆の真理である。特に我が国は平和を謳歌していると言われているが、その状態を認識する必要がある。

⑤は戦争の火種とも言える民族間、宗教間、文明間の問題である。日本は島国であるために、とかく周辺諸国と民族間、宗教間、文明間の対立軸がないかのような錯覚を持ってしまいが、決してそうではないということを理解する必要がある。国内にも日本人以外に先住民アイヌや在日韓国・朝鮮人等異民族が存在し、近隣の中国・韓国・ロシアとの間には領土問題が存在する。その意味でも異文化間の理解は欠かせない問題である。

⑥人間の尊厳とは、まさに生命の尊重である。我が国の場合、表面上は差別の問題は存在しないが、いじめによる自殺といった人間の尊厳を踏みにじるような問題は社会問題化している。まさにこういう現実にも目を向けることが重要である。

⑦は戦争の経験を語り継ぐことである。継承の問題は広島市だけの問題ではなく、全国的に戦争体験を語り継ぐ人間は年とともに減っていく。しかし、戦争体験をしていないからといって語り継ぐことは不可能かといえば、決してそうではない。そこに読書の意義があると考え。体験が物語として、記録として語り継がれていくことができるからである。



### 3. 教科書掲載の平和を考えるための読書材

#### 3.1 教科書掲載された読書材の特徴

平和を考えるための読書材を提案する上で、現行教科書（平成26年度版）に掲載されている教材について見ていきたい。そのいくつかは「読むこと」の教材として扱われている。そして、学習後にその作品に関連した図書の紹介がされていることが多い。今回光村図書と東京書籍について調べた。

低学年には、命の大切さを考える教材（『ずうっと、ずっと大すきだよ』『どうぶつの赤ちゃん』）はあるが、平和を直接考える図書の紹介はほとんどない。内容がおもしろいものを取り入れている傾向がある。これは「読書に親しむ」という入門期の読書指導として、読書意欲を高めるためと考えられる。以下、光村図書と東京書籍の読書材の中で、平和を考えるための読書材として適しているものを取り上げてみた。

#### 3.2 東京書籍掲載分

4年「ひとつの花」6年「ヒロシマの歌」（今西祐行）が読解教材として掲載され、関連図書として「〇〇年生の本だな」として以下の図書が紹介されている。

3年生の本だな：『ちいちゃんのかげおくり』（あまんきみこ）  
 5年生の本だな：『被爆者』（会田法行）  
 6年生の本だな：『弟の戦争』（ロバート・ウェストール）『ピカドン』『バスラの図書館員』（ジャネット・ウィンター）『シマが基地になった日』（真鍋和子）  
 【戦争と人間の生き方をえがいた本を読もう】  
 『すみれ島』（今西祐行）『とうろうながし』（松谷みよ子）『かあさんのうた』（大野允子）  
 『ヒロシマに原爆がおとされたとき』（大道あや）『ここが家だ』（アーサー・ピナード）『うそつき咲っぺ』（長崎源之助）『まぼろしの犬』（いぬいとみこ）『永井隆』（中井俊巳）『木かげの家の小人たち』（北見葉胡）

東京書籍は「〇年生の本だな」として、3年生、5年生、6年生に設定されている。特に6年生における「戦争と人間の生き方をえがいた本を読もう」と題したリストの数は多い。6年生における平和教育は国語を通して実現の可能性を秘めていると言える。

#### 3.3 光村図書掲載分

2年「この本、読もう」『けんかのきもち』（しばたあいこ）

戦争を扱ってはいないが、個人的な争いの心情を描写している作品として取り上げてみた。平和を考えるための小学校低学年の読書材として見た場合、適当かと考える。

3年「ちいちゃんのかげおくり」（あまんきみこ）関連図書  
 『おかあさんの木』（大川悦生）『えんぴつびな』（長崎源之助）『かわいそうなぞう』（つちやゆきお）

4年「ひとつの花」（今西祐行）関連図書

『おかあさんの紙びな』（長崎源之助）『おきなわ島のこえ』（丸木俊・位里）『まちゃんと』（松谷みよ子）『ペドロの作文』（トミー＝ウンゲラー）『チロヌップのきつね』（たかはしひろゆき）『ひろしまのピカ』（丸木俊）『せかいのひとびと』（ピーター・スピア）『せかいでいちばんつよい国』（デビッド・マッキー）『すみれ島』（今西祐行）『わすれないで』（赤坂三好）『山の学校の子どもたち』（長倉洋海）『彼岸花はきつねのかんざし』（朽木祥）『平和の種をまく』（大塚敦子）

6年「平和のとりでを築く」（大牟田稔）関連図書「本を読もう」  
『悲劇の少女アンネ』（シュナーベル）『涙一だれかに会いたくて』（長倉洋海）

光村図書は、読解教材として「ちいちゃんのかげおくり」「ひとつの花」「平和のとりでを築く」が設定されている。その関連図書として戦争を扱った作品を掲載している。中には、戦争を直接描写したものではなく、動物やデフォルメした形で描写したものがある。

### 3.4 両社の掲載に関する考察

両社の読書材を見たのであるが、小学校低学年における読書材はほとんどないといってよい。低学年は読書指導の入門期の時期であり、読書意欲を高めることに主眼が置かれているせいであろう。しかし、平和教育を意図した読書材は今後掲載される必要がある。

## 4. 小学校低学年向けとしての平和を考えるための読書材の提案

### 4.1 小学校低学年における平和読書材の在り方

小学校低学年において、戦争を直接描写したものは発達段階として理解が難しいことと、絵本が中心になるので、絵から恐怖のイメージがトラウマのように残存する可能性が大きい。その意味では、戦争を直接描写した物の扱いは慎重にすべきである。したがって、この段階における子どもには、戦争を直接描写した作品よりも、何か、たとえば動物を題材にして戦争を背景にとらえた形や、争いをデフォルメした形の物語の方が受け入れやすいと考える。

そこで、本稿では平和を考えるための読書材として、以下2冊の絵本を提案する。

### 4.2 読書材の候補1

『キラキラ』 やなせたかし作 フレーベル館

【あらすじ】

オビエ村ある高い山に住むという化け物キラキラを、弓の達人である兄のキルと棒の達人である東都のキリが退治しようと、まず弟キリが出かける。しかし、いつまでたっても帰って来ない。心配した兄キルは、その高い山に登り、今まさに弟キリに襲いかかろうとしているキラキラに弓を放つ。しかし、弟キリは兄キルに、キラキラは怪物ではなく、毒蛇にかまれた自分を看病してくれていたと聞かされ、キラキラにわびる兄キル。しかし、キラキラは「もっと早く友達になりたかった」と言い残して死んでしまうという話。

【平和について考える読書材としての価値】

キラキラが村人と交流ができず、互いに恐ろしい存在と認識してしまい、殺してしまうという悲劇は、見かけだけで相手を判断してしまったり、知らない間に人を傷つけてしまったりするという日常に起こりうる出来事である。子どもたちの日常でも友達や身のまわりの人たちに対する

認識は似ている面があるかもしれない。相手の理解は見かけではなく、対面交流が何よりも大切であることをこの物語は伝えている。その意味で、互いを積極的に理解しようとする姿勢が平和を考える上で重要なのである。

そして、作者自身が戦争経験者であり、だれよりも戦争を憎んでいる。その犠牲が子どもであるというのが、もともとやなせ氏の理念である。今後もやなせ氏の作品を是非洗い出していきたいと考えている。

#### 【作者】

やなせたかし

絵本作家。詩人。太平洋戦争に1941年召集。『アンパンマン』のシリーズは有名。

#### 4.3 読書材候補2

『青いかいじゅうと赤いかいじゅう』 デイビッド・マッキー作 きたざわきょうこ文 アーニ出版 1989

#### 【あらすじ】

高い山を挟んで、青いかいじゅうと赤いかいじゅうが暮らしていた。高い山には互いに話ができる程度の穴が開いていて、いつも話をしてしたが、ある日、言葉の行き違いから、口論となり、喧嘩に発展し、高い山を崩すほどの争いになる。そして、高い山を崩し終えて、二匹が見つめ合うと、二匹は互いのよさに気づき、最後は打ち解けあい、仲良く過ごすという話。

#### 【平和について考える読書材としての価値】

青いかいじゅうと赤いかいじゅうが、気持ちをうまく表現できず、ちょっとした言葉の行き違いで口論になってしまうという、子どもの世界にもよくありがちな姿が描かれている。赤いかいじゅうの一言がよくないのだが、赤いかいじゅうはその夜反省しているにもかかわらず、次になるとまた口論になってしまう。しかも、結局大喧嘩に発展し、全力で争う姿は子どもの喧嘩によく似ている。しかし、最後は互いを理解し合い、認め合う関係になるラストシーンが、違いを認めながら共生生活者として生きていく姿が描かれている。

訳者の北沢氏はあとがきで、当時米ソの対立やイスラエルとパレスチナの対立などに譬えているのではないかと述べている。確かにゴルバチョフの登場は1985年であり、ベルリンの壁崩壊はこの4年後である。一方、イスラエルとパレスチナの対立は現在進行形であり、中東問題は今複雑な構造を呈している。この物語の二匹の対立を現実社会のさまざまなメタファーととらえることで、大人でも読んで考えさせられるものになっている。

ただ低学年の子どもたちに、世界に起きている対立構造を感じ取らせる必要はないが、互いに気持ちをうまく表現できないばかりに、ささいな言い合いから喧嘩に発展することの愚かしさと、打ち解け合うすばらしさは、平和を考える上で重要であると考ええる。

作者の戦争に関する作品には『せかいでいちばんつよい国』（光村で図書紹介あり）と『六にんの男たちはなぜ戦争をするのか？』がある。『せかいでいちばんつよい国』は武力で占領することの愚かしさ、『六にんの男たちはなぜ戦争をするのか？』では、戦争の根底にある人間の欲の深さを看破している。いずれも平和を考える上での読書材として候補にすべきだと考えている。

#### 【作者と訳者】

デイビッド・マッキー

イギリスの絵本作家。絵と文の両方を手掛けた作品は30冊以上。他の作家の作品に絵を付けた



ものでも30冊を超える。有名なシリーズに「ぞうのエルマー」がある。

北沢杏子

教育評論家。1965年から性教育を中心とした活動を展開。各地を講演して回っている。世界の性教育、女性問題、少年非行などの取材をして評論活動を行っている。

## 5. 平和を考えるための読書指導の方法

平和を考える読書指導の方法については、小学校低学年の発達段階に応じたものが考えられる必要がある。以下に示した方法を提案する。

### 5.1 読み聞かせ

小学校低学年においては、読み聞かせという読書指導方法が適していることはいうまでもないかもしれない。手近に本があり、ちょっとした時間に読むことができるからである。読み聞かせは、話を読みながら、子どもの反応を知ることができる。場合によっては子どもと対面交流しながら読むことも可能である。読後に平和について考えるということも必要ではあるが、読み聞かせ中にリアルタイムでその都度、ページごとに子どもの反応や発言を取り上げて、読み進めていっても、十分平和を考えたことになると思う。

読後の場合は、登場人物や印象に残った場面、気になった場面をその場でページを示して考えさせることである。この場合、読解ではないので、子どもに自由に発言できるように促すことが必要である。

### 5.2 紙芝居

紙芝居は小学校の教室の広さにとっては、適合したアイテムであるといえる。幼稚園、保育所ではかなりの頻度で紙芝居に親しんできたものの、小学校に入ると、俄然頻度は下がる。というより皆無といっていいだろう。これは幼児向けという印象が強いからだろうが、読書治療、読書支援という観点からも紙芝居は重要な機能を有していると考えている。したがって、平和教育の観点からも、平和を題材とした紙芝居を扱うことが強く望まれる。

ただし、平和を題材とした紙芝居作品は少ないのが実態である。この点については次の項目で述べるが、絵本の紙芝居化も念頭におく必要があるだろう。

### 5.3 デジタル紙芝居

紙芝居作品の少なさを補う形で、絵本をデジタル化して子どもに提供することが考えられる。絵本によっては小さいものがあり、数名の子どもを相手にするしかない場合がある。幼稚園、保育所の現場では、まだよいが、小学校の教室という場では受容に困難さがともなうと思われる。そこで、絵本をデジタル化してプロジェクターで映しながら読めば、かなり広い部屋でも実践は可能であるとする。また、絵本や紙芝居以上の演出も可能である。<sup>\*4</sup>

筆者はパワーポイントにスキャンすることで、手軽にデジタル化する方法を試した。大学生相手の実践であるが、絵本の読み聞かせや紙芝居とはとは違って、200名入の大教室での読み聞かせが可能であり、十分鑑賞に堪えうることがわかった。

\*4 ここでの機能はパワーポイントにおけるアニメーション機能のことである。画面をさまざまに動かすことができる点で、絵本や紙芝居より変化に富んだ動きのある表現ができると考える。

#### 5.4 その他

その他としては、従来のアニメーション、ブッククラブ、リテラチャーサークルといった方法がある。小学校低学年に合わせた実践がこれまでも行われているので、平和を考える教材でも十分指導が可能であると考ええる。

### 6. お わ り に

平和を考える上で、読書指導の在り方を考えてみた。特に小学校低学年は、学校教育においては、平和教材が存在せず、関連図書にも掲載されていない。本稿では読書意欲を高めることが優先だと記したが、戦争を直接描写された作品を与えるのが憚れる年齢であることも理由として挙げられる。しかし、平和教育は0歳からという言の通り、低学年においても平和を考える読書材は必要である。その点で、今回提案した二つの作品は有効ではないかと考える。こういった読書材を発掘していくことが今後の課題である。

そして、今一つの課題は、リストづくりは所詮大人の発想によるものであり、当事者である子どもの意識は無視されている。子どもにとって平和を考える読書材、戦争を扱った読書材はどう受容されているのか、調査分析する必要があると考える。

### 7. 謝 辞

本稿は広島国語教育大学研究協議会において2014年7月11日に発表した資料をもとに、会員の方からのご助言ご意見を参考に作成したものである。会員の皆様には心より感謝致します。

なお、本会会員は筆者を含め現在以下の通りである。(氏名の50音順) 井口あずさ氏(比治山大学)、植西浩一氏(広島女学院大学)、河内昭浩氏(安田女子大学)、木本一成氏(広島経済大学)、神野正喜氏(広島女学院大学)。括弧内は所属。

### 参考・引用文献

- ①全国学校図書館協議会必読図書委員会編『何をどう読ませるか 小学校低学年』全国SLA 1994 p16 p26.
- ②『あたらしい国語上・下』(平成26年度版)[第1学年, 第2学年]東京書籍 2014.
- ③『新しい国語上・下』(平成26年度版)[第3学年から第6学年]東京書籍 2014.
- ④『こくご上・下』(平成26年度版)[第1学年, 第2学年]光村図書 2014.
- ⑤『国語上・下』(平成26年度版)[第3学年から第6学年]光村図書 2014.
- ⑥文部科学省『平成23年学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社 2012 p108-p109.
- ⑦文部科学省『平成23年学習指導要領解説 道徳編』東洋館出版社 2012.

[2014. 9. 25 受理]